

## 震災復興をテーマにした教科横断的な授業の提案 —新聞を生きた教材としたN I Eの実践を目指して—

七木田 俊・藤村 和弘・木村 義輝\*、菊地 洋・麦倉 哲\*\*

\*岩手大学教育学部附属中学校、\*\*岩手大学教育学部

(平成30年3月2日受理)

### 1. はじめに

東日本大震災から早くも七年が経つ。間もなく、震災を体験したものの当時の記憶がない生徒、そして震災を体験しない生徒が中学校に入学することになる。次代を担う子どもたちに、震災復興をどのように考えさせていくべきか。本プロジェクトでは、この問題意識を学部教員と附属中教員とで共有したうえで、昨年度までの成果、特に社会科を軸に震災復興を教育内容の中核に据えて特別単元を構想した昨年度の実践をもとに、総合的な学習の時間を軸にした発展的な特別単元の構想、実践を目指した。その際、学部教員の震災復興に関わる専門性、学問的知見をいかに(附属)中学校における授業に反映させるか、また新学習指導要領において強調される、新聞活用および教科横断的な授業を前述の視点に絡めて実現することはできないか、という視点を昨年度に引き続きテーマとし、本プロジェクトを進めることとした。

### 2. 本プロジェクトの問題意識

「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動を通して、3つの教育的価値(【いきる】【かかわる】【そなえる】)を育てる」ことをねらいとする「いわての復興教育」は、東日本大震災以降、これまでの教育活動を充実・深化させる形で行われてきた。附属中では昨年度、「震災津波の経験を踏まえた自然災害の理解・防災や安全」に関わる「そなえる」という視点を中核に、社会科を軸に特別単元を構成する中で復興教育を推進した。昨年度の実践をはじめ、これまでのプロジェクトでは、学部教員の専門的知識(学問知)を中学

校における授業に反映させるという視点から、本学部社会学研究室における『岩手県大槌町避難所調査報告書』所収の「大槌町避難行動調査」を社会科の資料として活用してきた。しかし、いわての復興教育の視点に改めて照らし合わせた際、そのほとんどが「そなえる」という視点に偏っていたことが指摘された。今年度は2学年での実践となること等も念頭に置き、「震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域づくり・社会参画」に関わる「かかわる」という視点から、その内容も鑑みて総合的な学習の時間を軸に復興教育的内容の実践を行うこととした。

他方、本テーマの1つでもある新聞活用および教科横断的な視点に関わって、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について(平成28年12月21日、中央教育審議会)』における、「こうした主権者として必要な資質・能力の具体的な内容としては、国家・社会の基本原則となる法やきまりについての理解や、政治、経済等に関する知識を習得させるのみならず、事実を基に多面的・多角的に考察し、公正に判断する力や、課題の解決に向けて、協働的に追究し根拠をもって主張するなどして合意を形成する力、よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に主体的に参画しようとする力である。これらの力を教科横断的な視点で育むことができるよう、教科等相互の連携を図っていくことが重要である。」「これらの力を育んでいくためには、発達段階に応じて、家庭や学校、地域、国や国際社会の課題の解決を視野に入れ、

学校の政治的中立性を確保しつつ、例えば、小学校段階においては地域の身近な課題を理解し、その解決に向けて自分なりに考えるなど、現実の社会的事象を取り扱っていくことが求められる。その際、専門家や関係機関の協力を得て実践的な教育活動を行うとともに、現実の複雑な課題について児童生徒が課題や様々な対立する意見等を分かりやすく解説する新聞や専門的な資料等を活用することが期待される。」、「その際、専門家や関係機関の協力を得て実践的な教育活動を行うとともに、現実の複雑な課題について児童生徒が課題や様々な対立する意見等を分かりやすく解説する新聞や専門的な資料を活用することが期待される。」という記述が参考になる。

附属中における総合的な学習の時間は、学年間の連携・接続といった縦の流れを考慮し、1年生から「自分自身を見つめる」、「他者から学ぶ」、「生き方を考える」と学年ごとに追究の視点を定めている。本実践の対象である2年生は、本年度「他者から学ぶ」という視点と「よく考え、誠をもって働く人間」という学校教育目標を鑑みて、年間の共通課題を『「誠をもって働く」とはどのようなことか」と設定した。校外学習における第一次産業従事者をはじめする、多様な価値観をもつ多くの他者から学びを得ながら学習を展開するが（詳細は後述）、これまでの総合的な学習の時間における実践を振り返ったとき、教科横断的な視点という横方向の拡がりやつながりが薄いこと、それに伴い教科等の内容と連携してもっと深めることができるはずの学びを十分に担保することができなかったことが課題として挙げられていた。そこで、復興教育の「そなえる」という視点から、社会科において学部教員の専門的知識（学問知）や新聞などの専門的な資料を活用し、それを内容的裏付けとしたうえで、追究活動を総合的な学習の時間の中で行うこととした。

### 3. 教科横断的な特別単元の構想

昨年度のプロジェクトで、社会科における公民的資質の涵養に関わる地域社会と現実社会との結びつきについて、以下のようにモデル化した。

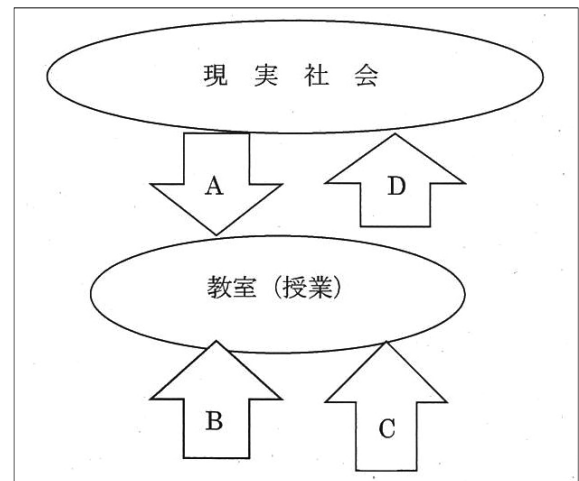


図1 授業と現実社会の関連モデル

- A：現実社会の理論・争点を教室に持ち込む（教室の社会化）
- B：生徒の知りたいことを教室空間の中核に据える（生徒側の視点／興味・関心の取り込み）
- C：科学的な知見（知識・方法）を学びの基盤に据える（授業者の視点／専門性の深化）
- D：教室空間での学びを現実社会へフィードバック（公民的資質の基礎（市民性）の形成）

昨年度はこのうちのDに着目しつつ、「新聞をつくる」「新聞を活用する」「新聞の機能を知る」というNIE（＝新聞に教育を）の3要素の「新聞をつくる」という面にスポットをあてて実践を行った。自助・共助・公助という概念理解を社会科で担い、国語科・美術科と横断的に授業を展開しながら、最終的に学びの成果をはがき新聞にまとめる、というものであった。今年度は前述の通り、附属中2学年を対象に、「他者から学ぶ」総合的な学習の時間を中核に

据えたうえで、社会科ではBおよびCに着目する。そこでN I Eにおける「新聞を活用する」要素を盛り込み、「震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域づくり・社会参画」に関わる問題意識を醸成する。そのうえで、総合的な学習の時間において被災地に実際に赴き、現地の様子を見て、講師の話聞くことで、「いわての復興教育」における「かかわる」という視点から、深い学びの実現を図る。具体的な単元計画は以下の通りである。

- 1…昨年度の振り返り（総合的な学習の時間）
- 2…宮古市田老の取り組み（社会科）
- 3…講師に迫る①（総合的な学習の時間）
- 4…講師に迫る②（総合的な学習の時間）
- 5…事前学習の情報を共有しよう  
（総合的な学習の時間）
- 6～8…被災地訪問学習  
（総合的な学習の時間）
- 9…単元のまとめ（総合的な学習の時間）

#### 4. 附属中における総合的な学習の時間

附属中では、総合的な学習の時間を「ヒューマンセミナー（HS）」と称し、3年間を通して人間としての生き方を追究している。また、学年ごとに追究テーマを設定したうえで、学習を展開している。

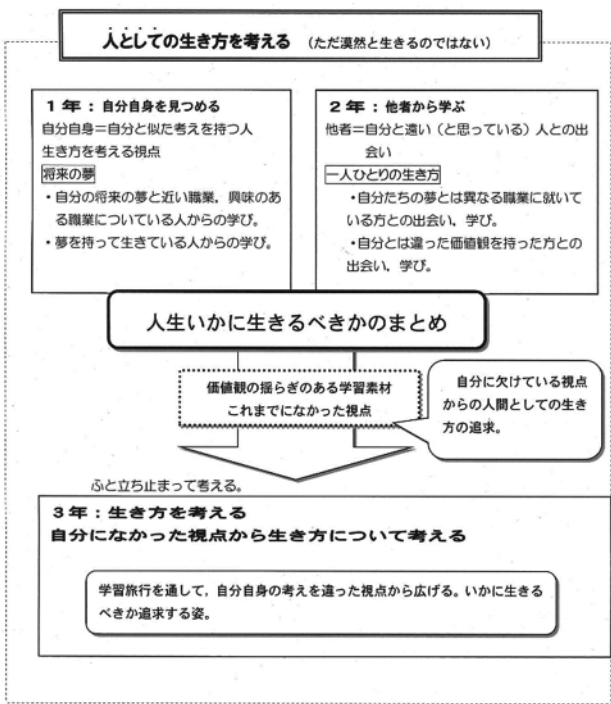
表1 附属中ヒューマンセミナー追究テーマ

【各学年の追究テーマおよび学年プロジェクト】		
学年	テーマ および 学年プロジェクト	基本的な考え方
1年	<b>自分自身を見つめる</b> 【生活トレーニングセンター】	「これまでの自分」「今の自分」「これからの自分」を意識しながら、自分の世界を見つめ、確かめて、自分の生きるべき世界を考える基盤をつくっていく。また、1学年は「学びの基礎」づくりであるため、「考え方や切り口」や「考え方のプロセス」を習得していく。
2年	<b>他者から学ぶ</b> 【校外学習】	仲間と共に他者の生き方に触れ、学ぶことを通して、自己の世界を広げ、さらには「人としての生き方」について、様々な視点から見つめ、自らの切り口で追究していく。
3年	<b>生き方を考える</b> 【学習旅行】	2年生よりも外に目を向けながら、社会の中でたくましく生きる人の生き様や心に触れ、自分たちの生き方を考える。これまでの学び方を生かし、振り返りながら、自己の生き方を考え、創造していく。また、人としていかに生きるべきなのかということを目に問いかけ、追究し続けていくための視点を持つ。

2 学年の追究テーマは「他者から学ぶ」であり、第一次産業体験に従事する講師の生き方に触れながら、学級ごとに異なる学習地で講師と

ともに日常の作業を体験する校外学習が、学習活動の中心となる。追究テーマに基づき、毎年度学年の実態等から共通課題を設定するが、本年度は『誠をもって働く』とはどのようなことか」と設定された。

図2 附属中のヒューマンセミナー構想図



これに基づいて、本年度の年間学習計画を次のように構想した。

表2 附属中ヒューマンセミナー年間学習計画

学年	時期	学習活動	学習内容
第2学年	前期	4月	学習ユニット4：校外学習を中心とした学習
		5月	「他者から学ぶ」学習活動。生き方学習の「自分の課題探し」がテーマとなる。
		6月	校外学習での取材を体験場面とする。共通テーマに関して、交流・討論による学びの共有・深化を図る。
		7月	
		8月	学習ユニット5：校外学習の学びを発見させ、復興教育の視点を取り入れた学習
		9月	校外学習での成果を踏まえ、3学年の「生き方を考える学習」に向けて、更に「他者から学ぶ」ことをメインとした調査学習を行う。その中で、復興教育の視点も盛り込みながら、困難に立ち向かって生きる人の姿に迫り、考えをまとめる。
	後期	10月	年内に、論文形式で、今年度の学習の成果をまとめる。
		11月	
		12月	
		1月	学習ユニット6：学習旅行を中心とした学習①
		2月	学習旅行に向けて、学習地・学習対象の決定。学習旅行に向けての事前学習。
		3月	
第3学年	前期	4月	学習ユニット7：学習旅行を中心とした学習②
		5月	「学習旅行」を体験場面として価値観の揺らぎを大切に学習とする。人の生き方に触れながら、これまでの自分の考えについて、もう一度立ち止まり、見つめ直し、新たな課題や視点を見つける。
		6月	
		7月	
		8月	
		9月	
	後期	10月	学習ユニット8：3年間を振り返り、生き方を追究する学習
		11月	3年間の学習を振り返り、自分なりの視点で「生きるとは」という課題について追究する学習。文化祭で発表し、卒業論文としての完成を図る。
		12月	
		1月	
		2月	
		3月	

## 5. 授業（特別単元）の実際

### （１）昨年度の振り返り（総合的な学習の時間）

各学級で異なる講師と出会い、体験を通して考えを深めた校外学習を核とする学習ユニット4の後半、意見交流会（パネルディスカッション）を行った。フロアを交えて議論が交わされたパネルディスカッションでは、「人との関わり」を大切に、「逆境」に打ち克つ講師の共通点を見出した。学習ユニット5の導入にあたる本時は、まず4学級の講師の共通点を学年で再確認し、学習ユニット4の学びを想起した。そのうえで、昨年度のプロジェクトにおける社会科授業「自助・公助・共助」を想起させうえて、宮古市企画部推進課拠点施設推進室長である齊藤清志氏をはじめとした「人との関わり」を大切に、「逆境」に打ち克つ沿岸部の方々から学ぶことを学習ユニット5の中核とすること、昨年度のプロジェクトの延長線上にも学習ユニット5が位置付けられ、復興教育的視点で学びを深めていくことを確認した。

### （２）宮古市田老の取り組み（社会科）

昨年度、社会科では主に自助・共助・公助という概念について、学部教員の研究成果をもとに、東日本大震災における避難行動等の実際を根拠に理解を深めるなど、主に内容面においてその中核を担った。今年度は、昨年度社会科で担った自助・共助・公助の概念的理解からさらに進んだ、震災復興に関わる理解の深化を本時の目的とした。単元を組み替え、地理的分野「（２）日本の様々な地域」のねらいである『世界の様々な地域』の学習成果を踏まえ、日本及び日本の諸地域の地域的特色をとらえる学習を通して、国土の理解を深める」ための中項目「ウ 日本の諸地域」を構成する小項目の1つである「（生活・文化を考察の中核とした）東北地方」におけるまとめの時間と位置付け、宮古市田老の次の新聞記事を扱った。

## 資料１ 宮古市田老の新聞記事

（「岩手日報」2017.2.20）



ここで、このきっかけをつくった人物こそ、前時紹介した齊藤氏であったことを補足したうえで、『社会科 中学生の地理（帝国書院）』の次のページに着目させた。

## 資料２ 教科書における宮古市田老の記述



また、同様に『中学校社会科地図(帝国書院)』の宮古市田老の様子を取り上げたうえで、前述の「震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域づくり・社会参画」に関わる「かかわる」という復興教育の視点から、宮古市田老で震災からの復興、まちづくりがどのように行われたのか注目させた。

資料3 地図帳における宮古市田老の記述



これらを資料として活用しながら、前時、講師として紹介された齊藤氏は当時、地域振興担当としてまちづくりを担当していたこと、地元地権者とのコミュニケーションを積極的に行い、「早く再建しないと、田老が田老でなくなる(齊藤氏談)」との思いで事業の説明や用地買収の交渉などにあたり、他の自治体関係者が驚くほどのスピードで住民の同意を取り付け、まちづくりを推進したことを補足説明した。そのうえで、昨年度の実践における、学部教員による公助のスライドを提示し、合意形成に至るまでのプロセスの困難さを再確認した。

生徒は軒並み「沿岸部では住民の合意が得られないと聞いている」、「どうやって同意を取りつけたのか」、「実際にどのようなまちがつくられているのか」といった反応を示し、復興に関

わる新たな視点を見出し、次時以降の学習に対する意欲の高まりが確認された。

### (3) 講師に迫る①・②～事前学習の情報を共有しよう(総合的な学習の時間)

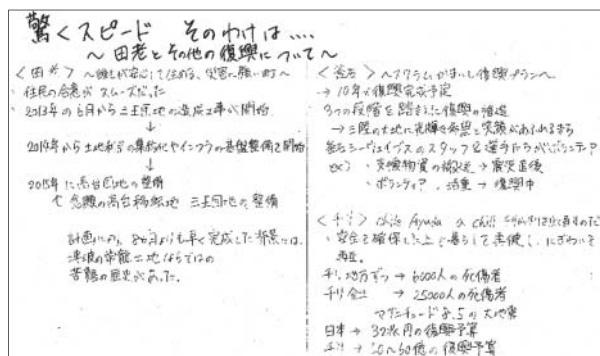
地域づくりやまちづくりといった、震災復興に「かかわる」新たな視点を社会科で獲得した生徒たちは、講師の齊藤氏に迫るうえでどのような情報が必要か、次のようにコンセプトマップを作成した。

資料4 生徒が作成したコンセプトマップ



そのうえで、グループ毎に視点を定め、ついで調べ学習を行い、次のようにまとめた。

資料5 生徒がまとめた事前学習の内容



各グループで調べた内容は、学級内の交流会で共有し、被災地学習の準備を行った。

写真1 学級交流会の様子



#### (4) 被災地訪問学習（総合的な学習の時間）

実施日：平成 29 年 10 月 10 日（火）

附属中 2 学年 159 名が宮古市田老に赴いた。午前中は齊藤氏の講演会、午後は防潮堤、たろう観光ホテルを周りながら、被災されたガイドの方に説明を受けた後、新たに建設された

写真 2 齊藤氏による講演会



山王団地を見学し、再び齊藤氏から説明を受けた。

写真 3 田老観光ホテルでのガイドによる説明



写真 4 山王団地での齊藤氏による説明



#### (5) 単元のまとめ（総合的な学習の時間）

被災地学習の所感を交流したうえで、被災地訪問学習の感想を次のようにまとめた。

#### 資料 6 生徒による事後の感想

「時間はかかったけど、やりきった。津波の被害がいかに甚大だったか、それを知ることができた。わかる言葉で伝える。しかし、それはほんの一部分の中。決して諦めず、一歩一歩、石畳にまた頭張、いこう、そう、思い、齊藤さんの家族のことが、あけ一言、私も思った。

今回の講演で、今まで何にも知らなかった。当時の、沿岸の被災状況、実際、被災した人たちの声、リアルな、つらい思い、そして、身も心も、大自然の恐ろしさも、はつきりと捉えることができた。やはり、実際にその地に行き、見聞して、初めてわかることも多い気がします。

復興学習を通じて、今後は災害に対する意識が高まりました。ガイドさんとお話した集団同調、バスの危険性、他人の言葉や情報を聴き合っていない（いざというときは自分が動かなければならない）ことも、今の私たちに、とても響く内容がいろいろある。自然に向き合い、意識しなければならぬことだと思います。

また、まちづくりにおいて、重要な役割をはたしている「人づかい」も、根拠、防災、減災という面では、非常に大切なことなのではないかとも思いました。いざというときのために、地域の人とのコミュニケーションを、まずは学校から実践していきます。

#### 6. まとめと考察

昨年度に引き続き、復興教育的内容で新聞を媒介に教科横断型の授業を構想した。生徒の感想から、概ね目的は達成されたように思われる。しかし、復興教育における「かかわる」という視点、また附属中における総合的な学習の時間のあり方、学部教員の学問的専門性と生徒の学びをつなぐ新聞活用など、それぞれのねらいがどの程度達成されたのかについては、さらに吟味が必要と思われる。時間をかけて分析し、次年度の発展的実践に備えたい。

（文責 七木田 俊）

#### 引用・参考文献

- 岩手県教育委員会（2013）『「いわての復興教育」プログラム』改訂版
- 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について』